石垣たまご理論について

その発想と展開

患者主体の慢性疾患の予防(注1)を実現する③

DIPEx・NBM・EBM(注2)、そしてART(注3)を「上腹部の柔軟性」で串刺しにする

統合理論について⑦

ROB治療によって「上腹部の柔軟性」が生まれ深く・長く・ここちよい呼気ができると「生と死」「予防・治療・ケアー・穏やかな死」「現代医学・東洋医学・各種医療」が統合される

「人は楽しむために生まれてきた」

たまごビルの行動の基本となる理念です。そのことを実現するための社会的役割分担が仕事であるととらえています。たまごビルでは、医療の分野から、慢性疾患の患者主体の予防方法の確立と普及をめざして、この任務にあたっています。

お迎えがくるまで「生きている」ことを、楽しませていただく。そのためにも、できるだけ病気にならない予防が必要であり、老化とともに病気の身であっても人生を楽しませていただくことが大事だと思っております。

Nさん（95歳）の同時進行ドキュメント

【Ⅰある日のNさんのご相談と診療風景】

6月16日（月）のベッドサイドでのNさんです。

「先生、今日はご相談があるのですが。お時間いただけないでしょうか」

いつもと違ったあらたまった雰囲気で、わたしも、一瞬どうしたのかなとおもいました。

「分かりました。後ほどお時間とらせていただきましょう」

と言ってROB治療に移りました。かみ合わせの悪さからくる口内炎の痛みもなくなり、いつものように鍼（はり）治療による足三里の雀啄（じゃくたく）（注4）で、上腹部が波打つように動きだし、呼吸が深くなってきました。それとともにNさんの顔はほほえみをたたえほころびます。脈の状態もしっかりとしてきました。

「ええーあんばいです。極楽です」

わたしは、治療効果と全身状況の確認のためにいつも聞き取りをします。

「どの部分が動きますか。どうですか」

それに対しNさんは、左手で左の下腹部を指し示しながら

「先生、ここです。この下腹部のところが動きだしました。ええー気持ちです。お腹が気持ちいいです。胸がスーッとしてきました」

【ⅡNさんのご相談の内容】

診療後、Nさんは伏し目がちにおずおずとわたしの前に腰をかけられました。落ち着かない様子でそわそわとおっしゃいます。

「先生、極楽の境地です。なんとも申しあげようがございませんとおっしゃいます。

ROB治療によって、腸管が動き出し、消化管ポンプ（注5）が動きだし、「上腹部の柔軟性」が出現してきます。横隔膜呼吸が活性化され（図1）呼吸と循環がととのいます。そして（表1）の現象のつながりが生まれてくるのです。Nさんがおっしゃるここちよい状態です。たまごビルの患者さんは、みなさん、この「しくみ」を、知識としても「からだ」でもお分かりになっておられます。

「はい、今日はこれでけっこうですよ。極楽・極楽・極楽。まだ、あの世へいかんでええからな」

「はーい。ほんとうにええーあんばいです」とベッドから起き上がりつつ、わたしもNさんも大笑いです。

なにか、カバンから取り出そうとされています。

「先生、これなんですが」と書類をわたしの手もとに出されました。

よく見ると、八尾市遺族会竜華地区N様となっており、全国戦没者追悼式に参列を希望する遺族について、と書かれていました。

「そうですか。追悼式の参列のことですね」と問うと、

Nさんは、「日本武道館でお参りできるなんて、夢にも、今日の今日まで、思いもよりませんでした。くじびきみたいなものでなかなかめぐってこなかったのですが、めぐってこないうちに、お亡くなりになる人がほとんどだそうです。それが、連合会の会長さんがNさんところ、娘さん二人のつきそいでいかれますかとわたしに伺いを立てるように言われました。

そして、

「6月20日の締め切りになっています。こんな土壇場になってしまいました。ここ1週間ほど、口内炎がひどく、食べると口の中がひりひりと痛み体に自信もなく、武道館に行けるかどうか迷っておりました。ところが、ROB治療のおかげで2・3日前から痛みもなくなり体も楽になってきました。自信がわいてきました。そのため、遅ればせながらお願いにあがりました」と控えめにおっしゃいます。

わたしは、「分かりました。気持ちとしては、ぜひ行きたいということですな」と単刀直入にお話しさせていただきました。

それからです。Nさんが危惧されていたところのモヤモヤがふきだしました。

「もう先生、先生が一生懸命、一日でも生かしてやろうと必死になって治療していただいているのに、わたしがこんなこと言って申し訳ない、ほんまに非常識なやつだと思われるでしょうが、1日や2日寿命がちぢんでもよろしいとおもって。まあ、そんなことを先生に言っていただけるなんて。頭から、お前はなにを考えてんじゃと、おしかりを受けるのを覚悟できました」とてれ笑いをしつつ、わたしの様子をみながらご自分の思いを吐露されました。

わたしは、「その思いで行きまひょ。まあ、95歳にもなったらなにがおこるかも分からへん。あなたの思いやご家族の気持ちを含めさせていただきます。それはええことやないの。ご主人と会えるやないの」と話すと、

「いやー。ほんとに夢のような話で」とNさんは、顔にくしゃくしゃの笑みをうかべつつ深々と体ごと頭を下げられました。

「いやーねー。やっぱりこの日本のためにがんばってくれた人やからなー。ご主人は。ほんまに。なんと多くの人が犠牲になられて、今の日本の礎を築いてくれたことか」と、わたしも思いがこみあげてきて言葉になりません。

Nさんは、「そやけどね。最近は、先生のようなことを言ってくれる人は少ないのです」と寂しげに話されます。

「うーん。」

しかし、家族への思いをひきずりながら行ってくれはったんや。二人目の子がお腹に宿ったのを知りつつ、いつ死ぬかも分からん戦地へ行きはったんや。胸が張り裂けそうやったと思う。ありがたいことや。（わたしは）ご主人のためにも、あなたを武道館に行かせてあげたい」

Nさんは、「ありがたい。本当にありがたい」と涙を浮かべました。

わたしも感極まって「何十年になるのかな。出征して何年になるのかな」というのがやっとでした。

Nさんは、「わたしは、今年で95でしょ。当時23歳ですから」

「そうかー、72年ぶりの再会やなー」とつぶやきました。そして、

「行程表をお持ちください。行程表をこなすのではなく、日本武道館で、ご主人と会うのが一番の目的ですから。他のことは、体の状態にあわせましょう。上腹部の柔軟性を維持できるよう万全の準備をし、ご主人と会えるまでは、とにかく上腹部の柔軟性を維持できるようにしてゆきましょう」

Nさんは、「先生。ご配慮をいただいてありがとうございます。まあ、うれしい」と一礼し、「はよ、三千代（次女）に報告しよう」といさんで帰っていかれました。

【ⅢNさん自身の人生と病歴】

それでは、実際にNさん自身の生い立ちから人生と病気の重なり（図2）を年代順にたどってみましょう。

1920年（大正9年）2月28日　Nさん出生。子どもの頃から食が細く、よく風邪をひき、発熱、関節の痛みがよくありました。医師からは若年性リウマチといわれていました。

1940年（昭和15年）　Nさん20歳。結婚。夫は一人っ子で23歳。美男子で、若い子のあこがれの的でした。

1941年（昭和16年）11月19日　Nさん21歳。長女出産。12月8日太平洋戦争始まる。

1943年（昭和18年）3月4日　Nさん23歳。夫出征。11月22日　次女出産。夫は次女がお腹に宿ったのを知っていたが、無事に生まれたことについては、連絡のとれないまま。Nさんの結婚生活は、2年と半年。どうして夫が戦争に行かなければならないのかと、持って行き場のない「いきどおり」があったそうです。

1944年（昭和19年）4月7日　Nさん24歳。夫はジャワ島駐屯からインパール作戦に従軍するため、ビルマに転戦。戦闘中、敵の迫撃砲弾を頭と両大腿部にうけ、隣村出身の戦友に末期の水をうけつつ、看取られ死亡する。後日、ビルマの戦地より、その戦友からの葉書きでそのことを知る。軍の検閲があるため、詳細は日本に帰ってから詳しくお話するとのことであった。

しかし、戦況の悪化の中、補給路がなかったために、その戦友の方は逃げまどいながら、飢えとの戦いの中でみじめな最期を迎えられたそうです。

Nさんはしみじみと次のように、おっしゃいます。「死んでゆくのに、いいも悪いもありませんが、主人の場合、戦闘中の負傷で、仲間に看取られつつなくなったので、ありがたいな、良かったかなと思っています」

1945年（昭和20年）2月　Nさん25歳。実姉（31歳）肺炎で死亡。その姉に2人の子の世話をしてもらい、自分は働いて生計を立てようと思っていた矢先に、その姉までも失う。さらに加えて7月、夫の遺骨が戦地から帰り、村での村葬にNさんが参列していた時に、実父（71歳）が肝硬変（じょうこうへんしょうへん）で亡くなったとの電報が家に届く。8月15日、大東亜戦争が終わる。

その上この年から48年まで舅・姑が交互に病気になる。この老夫婦には、一人っ子の息子の戦死が非常なショックだったのでしょう。Nさんには舅・姑の看病疲れが重なり、Nさんの病気の引き金となりました。

1949年（昭和24年）8月　Nさん29歳。肺門リンパ節炎を発病。2年間、闘病。

1951年（昭和26年）　Nさん31歳。舅死亡。

1956年（昭和31年）10月　Nさん36歳。虫垂炎手術。

1961年（昭和36年）10月　Nさん41歳。姑死亡。

舅・姑の看病に明け暮れること10年以上、その2人の看病では昼と夜が逆転していました。夜は老人二人が起きているのでNさんは寝られず、逆に昼は老人たちは寝ているが、Nさんは日々の用事と仕事で休むこともできなかったとのこと。また当時は衣類も少なく、暖房設備も今ほど十分ではなく、もちろん使い捨ての紙オシメなどない時代で、布オシメを手洗いで洗濯しなければなりませんでした。

あるときなど、2月の寒い時に、綿入れの着物を舅が汚したために、長女の瑠美子さんが近くの川で、手先が切れるからと思うぐらいの経験をしての洗い物をしたことも何度かあったとのことです。ましてや今日のような介護保険などもなく、他人の手に頼ることなどできない時代なので、実に大変な日々だったのです。

Nさんの夫にあたる方は、一人っ子だったため、Nさん一人の肩に両親の介護の務めがかかってきたのです。まさに地獄の日々であったそうです。しかしNさんはいつも私にこうおっしゃいます。

「その両親が元気なときには、いつも自分を我が子のようにやさしくしてくれていました。それが、つらい介護をしているときでも気持ちの支えになっていました」

けれども、このころから次第にNさんは体調が悪くなり、微熱が続くようになりました。Nさんの体の状態を、さらに聞いてみましょう。

1962年（昭和37年）7月　Nさん42歳。子宮癌手術。翌日から高熱。それが40日間続く。腎臓、肝臓に関する検査数値は悪く、食欲がなく、病気の回復に時間がかかり、ようやく7カ月後に退院する。

1971年（昭和46年）　Nさん51歳。甲状腺機能低下症。心臓要注意との診断。

1982年（昭和57年）　Nさん62歳。不整脈が多くなる。

1991年（平成3年）　Nさん71歳。不整脈がひどく、ホルター心電図で危険状態であると診断される。（ホルター心電図9万回の心拍のうち、結滞が16000回もある状態であった）

12月23日　腎盂腎炎（じんう）で発熱、即入院。

12月28日　退院。

12月29日　吐き気。発熱。食欲がなくなる。

1992年（平成4年）　Nさん72歳。1月1日から毎日、点滴のため、病院に通院。全身痛む。

1月4日　再入院（脱水症状による）

2月7日　病気の症状の原因は不明のまま退院。症状はよくならず。食べるものは砂をなめるように味気なく、まるで拒食症にかかったように、食事の時間が近づくのを恐怖とさえ思われる毎日でした。

Nさんは入退院を繰り返し、不安におののき、一時は、家族の世話にならず、早くお迎えがきてほしいとまで思われていました。一家心中までも考えておられたそうです。

4月7日　Nさんが初めて当院受診。Nさんのように慢性疾患を束のように抱えて（図2）、しかも一般の病院では原因不明とされる症状に対しては特に、なによりもNさん自身のたどった人生を診る必要があります。それがNさんのNBMです。

その上にたって、たまご理論に基づく内臓調整が始まりました。ゆがめられていた「Nさんの健康体（図2）」が徐々に息づいてきました。その後は、本人が驚くほど心臓の不整脈がなくなり、一生飲まなければならないと言われたクスリも全く飲む必要がなくなりました。

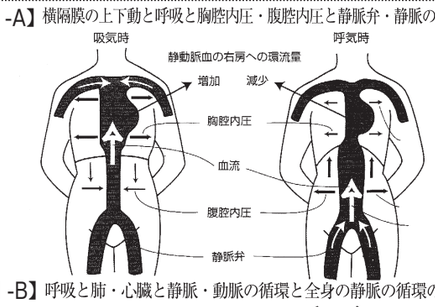
それどころかついには、毎日を楽しく生きる歓びと意欲が出てきて、当院の患者さんの会＝たまご会の短歌クラブに参加し、また菜園の野菜づくりに精を出し、いきいきと活動できるようになられました。

その後、Nさんは、肺炎を2年続けて（85・86歳）患われましたが、Nさんにとっては多臓器不全の恐れある抗生物質ではなく、ROB治療のみで肺炎を治していただけました。それからは、ROB治療をつづけられ8年間肺炎の予防がなされています。

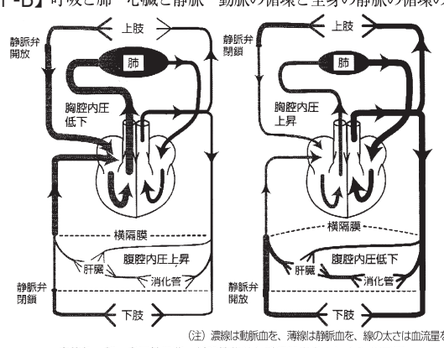
そして、今回8月15日、日本武道館で行われる「全国戦没者追悼式」にのぞまれることになりました。

次回（8月25日号）は、8月14・15日の行程表を中心にしてROB療法にもとづく予防法を具体的に述べてゆきたいと思います。

【図1-A】横隔膜の上下動と呼吸と胸腔内圧・腹腔内圧と静脈弁・静脈の流れ



【図1-B】呼吸と肺・心臓と静脈・動脈の循環と全身の静脈の循環の強弱



（注）濃線は動脈血を、薄線は静脈血を、線の太さは血流量を表す。

安倍紀一郎、森田敏子著：循環機能学と循環器疾患のしくみ 第三版、P35、日総研出版より引用　図6A・Bのタイトルは石垣が付記

注1　『現在の日本医療再生への提言』　現在の日本では慢性疾患の患者主体の予防が必要とされている。
＊疾病構造の変化により慢性疾患の予防とケアーが医療の中心に
＊慢性疾患の予防と治療に対応できていない現在の医療とその理由
＊EBM根拠にもとづく医療の最も信頼性の高いレベル1の根拠を「ランダム化比較試験」＝疫学的な統計データに何故おかねばならないのか
18年1月1日号参照

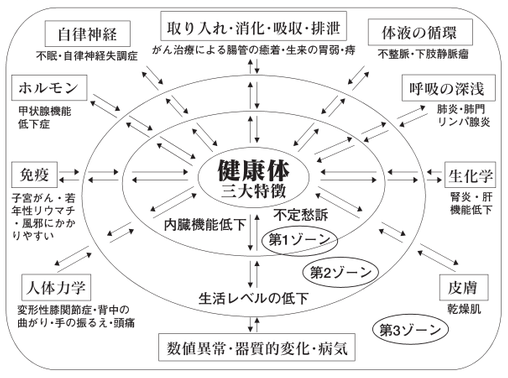
注2　EBM（Evidence Based Medicineの略）とは「根拠にもとづく医療」の意味。
NBM（Narrative Based Medicineの略）とは「物語と対話による医療」の意味。
DIPEx（Database of Individual Patient Experiencesの略）とは「患者個人個人の体験が分類整理されたデータ」の意味。患者さんのみならず家族・医療専門家にも、多面的に利用されようとしている。

注3　わたしは、「ART」とは、一人ひとりの体験にもとづく体全体の情報から生まれる「直感」、と定義している。
「直感」とは、説明や証明を経ないで、物事の真相を心でただちに感じ知ること。

注4　雀啄とは、雀が啄（つい）ばむように、鍼を刺入しながら上下に操作すること。

注5　わたしが提唱する新たな考え方である消化管ポンプについては、22年10月25日号・11月15日号での『血液の循環は消化管（胃腸）が支配する②・③』と24年6月15日号『現代医学に新たなページを開く「上腹部の柔軟性」③』を参照下さい。

【図2】Nさんの健康体と慢性疾患の関係



今後のあるべき医療
健康体を活かす医療
たまご理論で病気のしくみを考える

たまごビル院長　石垣　邦彦
〒581-0061　大阪府八尾市春日町 1-4-4
電話 072(991)3398　FAX 072(991)4498
ホームページアドレス http://www.tamagobl.com/

【表1】
人は楽しむために生まれてきた！
～人間の生死は「上腹部の柔軟性」が指標となる～

ROB治療で「上腹部の柔軟性」が正常化されると・・・
「入り出」がととのい、深く長くここちよい呼気ができる

・呼吸が深くなり
・循環が良くなり
・人体力学が安定し
・自律神経がととのい
・内臓全般の動きが活発になる

●生きる力がつく　⇒　生き方が身につく
●総合的免疫力がつく　⇒　予防ができる
●自然の治癒力がつく　⇒　治療が的確に
●自然なバランス力がつく　⇒　自然なケアー
●自然な死への流れができる　⇒穏やかな死

■人間の体の自然な「しくみ」が生かされ
ROB治療で人生が統合される！！

暑中お見舞い申し上げます
株式会社　岩田良
代表取締役　岩田良三
本社　八尾市西山本町一―二―三五
TEL〇七二（九九九）二三四五（代）

プラスチックの総合メーカー
ヤマトエスロン株式会社
取締役社長　松下　俊治
本社 本社工場 〒581-0004　大阪府八尾市東本町5丁目1番31　電話　八尾(072)991-1261(代)
大阪工場 〒581-0003　大阪府八尾市本町1丁目5番15号　電話　八尾(072)993-2251(代)
関東工場 〒327-0816　栃木県佐野市栄町5番4　電話　佐野(0283)24-4131番(代)
福岡工場 〒811-3134　福岡県古賀市青柳2843番2　電話　古賀(092)943-2414番(代)
静岡工場 〒437-0053　静岡県袋井市延久字高田270番1　電話　袋井(0538)43-0012番(代)
台湾耶馬都惠須龍股份有限公司　TEL+010-886-35-984030
ヤマトエスロン(タイランド)株式会社　TEL+010-66-38-570-462
大和惠須龍塑膠(蘇州)有限公司　TEL+010-86-512-87679007

八尾警備業協同組合
代表理事　古川義男
【事務局】
〒581-0003
八尾市本町３丁目11番17号
TEL(072)990-0333　FAX(072)990-0330

八尾の八日戎
お守　お札授与　吉兆　福びき
商売繁盛　家内安全
八尾戎神社
八尾市本町４丁目2-45

八尾天満宮
宮司　菅尾龍太
〒581-0003　八尾市本町四丁目二―四五
電話〇七二―九二二―三五五八
FAX〇七二―九二二―三五五八

河内地域で事業展開！
しょうなん調剤薬局
有限会社しょうなん
代表取締役　薬剤師　堀江昭伸
八尾市安中町8―3―20